



中高生とともに差別と闘う

『納骨堂・『風の舞』・庵治第二小』

吉成タダシ



ハンセン病療養所大島青松園へ

お天気に恵まれた九月初旬、休日の早朝。文化祭で上演した小説劇「ツノオト」にたずさわった中学生が、晴れ晴れとした表情で集まってきた。それまで文化祭を成功させるため、夏休みから毎日のように緊張感を感じながら生活してきたことを考えると、それはひとときの「ご褒美」のようでもありました。

学校のはからいで貸し切られた小型バスにルンルンで乗り込み、いざ大島青松園へ！ところが乗ったバスのテレビから流れてきたのは、映画「あん」。無粋とは思いつつ、せっかくなんだから、と私が用意したものでした。テレビに真剣なまなざしを向ける生徒たち。でも途中のSAでは若い先生におねだりしてソフトクリームをキヤッキヤと頬張る。そんな一面も、中学生らしくていいものでした。

船着場に着き、連絡船に乗り込み、そして大島へ。船を下り、どっしりとした青松に迎えられるながら、静けさのなか一歩一歩あゆみを進めていきます。研修はじめは園内フィールドワークからのスタートでした。

「まず島に着いたとき、思っていたいかに少し迷ったけど、『いいところ』だなと思えました。ハンセン病になり、つらい思いをして暮らしていたりすると、『いいところ』と思うのはダメかなとも思ったりしたけど、それでも僕は静かできれいな『いいところ』だと思えました」

生徒の率直な感想ですが、私も思うところがあります。この国は産業

廃棄物や最終ゴミの処分場、原子力発電所などを、風光明媚で人里離れた、人目につきにくいところに追いやる傾向があります。いわゆる「迷惑施設」近隣で暮らさざるを得ない人からすれば、その景色は苦々しいものでないでしょうか。また強制的に隔離された人からすれば、その明と暗の対比に、我が身を、我が人生を呪ったのではないのでしょうか。

納骨堂・「風の舞」・庵治第二小

「島を歩いてみて、上手く表せないけれど悲しくなりました。遺骨を納めていたところに行つて中を見たとき、言い方は悪いけど絶句しました。狭いところに何十人もの遺骨があつて。持ち帰った遺族もいると言っていました。ほんの一部だけでたくさんさんの遺骨が残っていました。たくさんさんの人が家族に会えず、友達に会えず、一生をここで終えたんだと思うとつらくなりました。私が今、家族と過ごせること、学校で友達に会えること、当たり前だと思つていたことが、そうではないんだと気づきました」

坂道を登つては説明を聞き、また登つては説明を聞き、納骨堂に着いての感想です。骨壺の一つ一つに名前があつて、家族がいて、人生があつて。そんな想像を巡らせると、その巡らした想像に我が身が覆い尽くされてしまふようで、どうしても神妙

な面持ちになってしまいました。

「風の舞」へとたどり着きます。葬られた魂が風となり、どこまでも自由に空に舞い上がつていきますようにとの願いを込めて制作されたモニュメント「風の舞」。そこからは遠くに高松市の町並みが望めます。夕暮れになると、街明かりも見えます。「島になれば……」手を伸ばせば届きそうなのに、行くことができない。思うように自由に、この広い大空に羽ばたけたなら、と思つたのではないのでしょうか。

「施設をまわるとき、島の外の景色を見ていた。とてもきれいだつた。昔強制的に來らされた人たちは、こんな景色を見ていたんだと思つて、何かすごいなと思つた。納骨堂や「風の舞」とかもまわつて、何か違う空気を感じた。ここに來らされた人たちは、自分たちと違う空気を吸つて生きていたんだと思つたら、何かよく分からなくなつてしまつた」

「よく分からなくなつてしまつた」というのも、正直な感想だと思つた。たくさんさんの感情がどつと流れ込むと、何が何だか分からなくなつてしまふ、そういうものだと思います。

昼食休憩のあと、午後からは入所者のみなさんからお話を聞く予定でしたが、そのちょっとした合間に、島内をさらに散策することにしました。生徒たちが向かった先は、庵治第二小学校。この島唯一の小学校です。とはいえ、現在児童数は0。この春、休校になりました。それまで

在籍していた小学六年生のドキュメント番組を見せていたので、気になつていたのでしよう。

「先生、あの小学生は、今どここの中学校に行つてるんですか——」

古びた、人気がない小さな教室を、くすんだ窓の外から眺めながら訊いてきました。そこまで思つてはいませんでした。確かに校区の中学校に通つてはいるはず。そんな中学生とつながりたい」と、心の声が聞こえた気がしました。

受け継がれる魂

研修に行つた週末——

「先生、樹木希林さんが亡くなりました」計報の翌日、一緒に研修に行つた生徒が駆け寄つて告げました。気持ちを上手く伝えられない思いが、私を真っ直ぐに見つめる瞳に揺れていました。「あー、あのタイムングで見せられて良かった」と天を仰ぎました。

「船で帰るとき、なぜか寂しかった。絶対にまた來たいと思つた。そして、このことをみんなに伝えていかなければいけないと思つた。この研修のおかげで、人権問題についてもっと学びたいと思つた」

人生とか巡り合わせとは不思議なもの。命は尽きても、その魂は残り、受け継がれていく。そんなことをふと思ひました。どんな出会いが人の生き方を変えるか分かりません。若い感性には、その可能性が大いにあると感じさせられました。